現代日本の大学生と音楽の好み

――「大学生の生活と意識に関する調査」をもとに――

木　島　由　晶

キーワード：青少年，ポピュラー音楽，ジャンル，好み，文化的寛容性

Ⅰ．問題設定

趣味に関する文化社会学的な研究の礎を築いたのはP・ブルデューだが，ブルデューへの多大なリスペクトを示しつつも，以降の文化研究はさらに実証的な調査を積み重ねている。では，今日の文化消費の傾向はどのように捉えられるだろうか。

T・チャンとJ・ゴールドソープは，先行研究にみられる仮説を３つに大別している（Chan & Goldthorpe 2007；平石 2019）。第一は相同性説であり，階層と文化的な好み（cultural taste）が一対一で対応するというもの（Bourdieu 1979＝1990 など），第二は個人化説であり，再帰的近代化の進展にともない階層と好みが無関連になるというもの（Bauman 2002 など），第三は雑食化説で，高級文化を好む人たちが大衆文化にも一定の理解を示すというものだ（Peterson & Kern 1996 など）。多文化主義やポリティカル・コレクトネスが常識となった今日の状況では，先進国で最も支持されている仮説は雑食化説であり，日本では片岡栄美がいくつかの調査データを用いて文化的雑食化（オムニボア化）の進展を主張している（片岡 2000→2019：

第4章など)。

この文化的雑食化は，見方を変えれば文化の「フラット化」(遠藤 2010)として映る。ここでいうフラット化とは，実際に文化的差異が消滅したことを指すのではない。あたかもフラットであるかのように見えてしまう社会の機制を指しているのだが，小藪明生と山田真茂留は，人びとの文化的な好みがフラット化した理由として，文化的雑食化の進展を指摘している。音楽で言うと，かつては対抗文化であったはずのロックが制度化することでその装いを失い，反対にかつてはハイカルチャーであったはずのクラシックが社会に浸透するにつれて敷居を下げるといった「ハイ＝ポピュラー分節の稀薄化」が進んでいて，このことが聴衆の側では文化的雑食化として現れているのだという（小藪・山田 2013)。

とはいえ，細かい実相については不透明な部分も多い。たとえば片岡が調査した1990年代と同様の結果が2020年代でも確認できるかどうかには考察の余地がある。あるいはT・ベネットらが指摘するように，文化的雑食化の測定にはさまざまな議論の余地があり，なかでも従来の研究においては「入手できるデータが依然として『高尚な文化』中心であること」(Bennett et al. 2009＝2017：148）が指摘されているのだが，ポピュラー音楽に比重を置いたデータセットでも，あるいは大学生を対象にした調査においても，同様の結果が確認されるのかどうかは判然としない部分がある。その背景には，日本においては文化社会学的な研究は質的な調査に偏っていて，計量的な調査研究が不足している現状があると指摘されている（北田＋解体研 2017)。

そこで本稿では，音楽の好み（music taste）とデモグラフィックな変数との関連，なかでも社会階層に関わる変数との関連について，大学生を対象とした質問紙調査の結果に基づき分析を試みたい。

Ⅱ．仮説と変数

1．データの概要

本稿で用いるデータは，2019年度～2023年度の科学研究費補助金［基盤研究A］「現代若者の再帰的ライフスタイルの諸類型とその成立条件の解明（研究課題番号：JP19H00606）」（代表：浅野智彦東京学芸大学教授）の一環として実施した，「大学生の生活と意識に関する調査」である。この調査は2020年9月から11月にかけて，全国の19大学に所属する大学生を対象におこなわれた。コロナ禍のため，オンラインアンケートフォームを用いた集合式調査でおこなわれており（一部，質問紙を配布），有効回答数は1059，平均年齢は19.96歳，その内訳は男性：370，女性：665，他：24であった。本調査には限界も多いが，大学横断的にサンプルを集めた調査は多くないため，一定の意義はあるものと思われる。詳細な説明については次のウェブサイトを参照されたい（http：//jysg.jp/img/flash 20210327.pdf）。

2．仮説と方法

大まかな仮説は，入学難易度や暮らし向きに余裕のある人ほど，クラシックやジャズを好み，文化的雑食性が高いというものである。この仮説は，SSMのような階層文化を明らかにするための質問票で，全年齢を対象にした調査では実証的に確かめられている（片岡 2019など）。この仮説が大学生にも当てはまるのかどうかを確認することが本稿の目的の1つである。また，ポピュラー音楽に比重を置いた質問票を用いた大規模調査の利点を生かし，アイドルやアニメソングといった好みの特徴を探索することをもう1つの目的とする。

3．従属変数

従属変数は2種類ある。第1は，好きな音楽ジャンルである。すなわち

「あなたの好きな音楽ジャンルは何ですか。当てはまるものをすべて選んで○をしてください」という設問において，「その他」と「好きなジャンルはない」をのぞく15のジャンルの項目をそれぞれ用いる。表1には，好きな音楽ジャンルの分布を示している。アイドルの割合が相対的に高い点に大学生らしい特徴を見て取れるだろう。

第2は，文化的寛容性である。文化的雑食性の測定にはさまざまな方法があるが，本稿ではB・ブライソンにならい（Bryson 1996），回答者が選んだ好きな音楽ジャンルの総和を文化的寛容性cultural torelanceと呼んで分析に用いる。表2は15ジャンルのうち，回答者がいくつのジャンルを好んでいるかを示している。中央値は3.00，平均値は3.28で，ほとんどの人が好むジャンルの数は1つから5つまでであることがわかる。

4．独立変数と統制変数

独立変数は，広い意味での社会階層に関わるものである。本稿では，大学生調査でそれに相当すると思われる，入学難易度，相続文化資本，暮らし向きの良し悪しを主要な変数と位置づけ，他に父母の学歴を用いる。具体的には次のように変数にした。

入学難易度については，回答者の所属している大学の入試難易度を，河合塾のKei−Net大学検索システムをもとに算出した数値を用いた。文化資本については，幼少期に親からしてもらった経験として，絵本の読み聞かせ，クラシック音楽の視聴，美術館や博物館での展示品の鑑賞，歌舞伎や能などの伝統芸能の鑑賞という4項目について因子分析を実施し，抽出された因子は1つ，クロンバックのα係数は .651であったため，主成分分析をおこないその第1主成分（寄与率49.0％）を分析に用いた。暮らし向きについては，「現在，あなたの家の暮らし向きは，いかがですか」という質問に対し，「余裕がある」（＝4），「やや余裕がある」（＝3），「ふつう」（＝2），「やや苦しい」（＝1），「苦しい」（＝0）とした。父母の学歴については，最終学歴が大

学卒・大学院卒を1，それ以外を0に割り当てたダミー変数を用いた。

さらに，その他の統制変数として，性別，年齢（男性ダミー），大学所在地を用いた。各変数の詳細については表3を，記述統計量については表4を参照のこと。

表1　好きな音楽ジャンルの分布（複数回答）

ジャンル名	度数	%
Ｊポップ	815	77.3
アイドル	395	37.5
ロック	388	36.8
アニメ・声優・ゲーム	330	31.3
洋楽ポップ	328	31.1
Ｋポップ	301	28.6
ヒップホップ・Ｒ＆Ｂ	195	18.5
クラシック	165	15.7
ジャズ	155	14.7
ハウス・テクノ・ＥＤＭ	129	12.2
フォーク・アコースティック	61	5.8
レゲエ	46	4.4
パンク・メロコア	43	4.1
ヴィジュアル系	31	2.9
演歌・歌謡曲	25	2.4

表2　好きな音楽ジャンル数の分布

個数	度数	%
0	27	2.6
1	160	15.2
2	239	22.7
3	237	22.5
4	162	15.4
5	99	9.4
6	51	4.8
7	41	3.9
8	24	2.3
9	11	1.0
10	2	0.2
11	1	0.1

表3　変数の概要

	変数名	概要
従属変数	（a）好きな音楽ジャンル ロック パンク・メロコア ヴィジュアル系 Ｊポップ 洋楽ポップ Ｋポップ アイドル ヒップホップ・Ｒ＆Ｂ レゲエ ハウス・テクノ・ＥＤＭ 演歌・歌謡曲 フォーク・アコースティック クラシック ジャズ アニメ・声優・ゲーム	「好きな音楽ジャンル」として用意された15項目のそれぞれに対し，選択した場合を1，選択しなかった場合を0に割り当てたダミー変数。
	（b）文化的寛容性	各回答者が「好きな音楽ジャンル」として選択したジャンルの合計をそのまま足し合わせて用いた。
独立変数	暮らし向き	「現在，あなたの家の暮らし向きは，いかがですか」に対し，「余裕がある」（＝4），「やや余裕がある」（＝3），「ふつう」（＝2），「やや苦しい」（＝1），「苦しい」（＝0）とした。
	文化資本	「子どもの頃，家族の誰かがあなたに本を読んでくれた」「子どもの頃，家でクラシック音楽のレコードをきいたり，家族とクラシック音楽のコンサートに行った」「子どもの頃，家族につれられて美術館や博物館に行った」「子どもの頃，家族と歌舞伎や能などの伝統芸能を見に行った」の4項目について因子分析をおこない（抽出された因子は1つ），クロンバックのαは.651であったため，主成分分析をおこなった第一主成分（寄与率49.0%）を「文化資本得点」として分析に用いた。
	入学難易度	河合塾kei-Net大学検索システムの入試難易度を基に算出。
	父学歴	最終学歴が大学卒・大学院卒を1，それ以外に0を割り当てたダミー変数。
	母学歴	最終学歴が大学卒・大学院卒を1，それ以外に0を割り当てたダミー変数。
統制変数	性別	男性に1，女性に0を割り当てたダミー変数。
	年齢	実年齢をそのまま用いた。
	大学所在地	回答者の通っている大学のうち，東名阪の都市圏とその周辺にある大学を1，それ以外に0を割り当てたダミー変数。

表４　記述統計量

	平均	標準偏差	最小値	最大値
（ａ）好きな音楽ジャンル				
ロック	.37	.483	0	1
パンク・メロコア	.04	.198	0	1
ヴィジュアル系	.03	.169	0	1
Ｊポップ	.77	.419	0	1
洋楽ポップ	.31	.463	0	1
Ｋポップ	.29	.452	0	1
アイドル	.37	.484	0	1
ヒップホップ・Ｒ＆Ｂ	.19	.388	0	1
レゲエ	.04	.204	0	1
ハウス・テクノ・ＥＤＭ	.12	.328	0	1
演歌・歌謡曲	.02	.152	0	1
フォーク・アコースティック	.06	.234	0	1
クラシック	.16	.364	0	1
ジャズ	.15	.354	0	1
アニメ・声優・ゲーム	.31	.464	0	1
（ｂ）文化的寛容性	3.232	1.923	0	11
暮らし向き	3.53	1.023	1	5
文化資本	.00	.997	−2.05	2.58
入学難易度	53.88	7.371	30	65
父学歴	.56	.496	0	1
母学歴	.27	.446	0	1
性別	.358	.479	0	1
年齢	19.96	1.133	18	25
大学所在地	.798	.401	0	1

n=1059

分析は，最初に文化的寛容性について扱い，次により細かな音楽の好みを扱うという手順で進める。それぞれの分析では，まずは平均値の比較や相関係数の算出などの基礎的な分析をおこなって大まかな傾向をつかむ。そのうえで，全ての変数を投入した多変量解析をおこない，暮らし向きの良し悪しや入学難易度が好きな音楽ジャンルの数や音楽の好みに与える影響を明らかにする。なお，以下の分析では有意差を次のように表す。＊＊＊＝0.1% 水準で有意，＊＊＝1% 水準で有意，＊＝5% 水準で有意，†＝10% 水準で有意。

Ⅲ．分析結果

1．文化的寛容性に関する分析

まずは文化的寛容性から検討しよう。表5は，回答者が好む音楽ジャンルの数が，文化資本の多寡や，暮らし向きの良し悪し，入試難易度の高低によって差があるのかどうかを，一元配置分散分析で調べた結果である。

表5　文化的寛容性に関する平均値の比較

	文化資本	
	平均値	標準偏差
高群	3.53	2.09
中群	3.10	1.73
低群	3.10	1.90
分散のF検定	F値5.22	P＜.01
	暮らし向き	
	平均値	標準偏差
余裕がある	3.16	1.93
ふつう	3.31	1.92
余裕がない	3.30	1.92
分散のF検定	n.s.	
	入学難易度	
	平均値	標準偏差
高難易度	3.40	1.92
中難易度	3.04	1.86
低難易度	3.20	1.98
分散のF検定	F値3.21	P＜.05

文化資本においては，高群と中群・低群との間で有意差が見られた（1%水準）。つまり幼少時に親から文化的な経験を与えられた人のほうが，好きなジャンルの数は多くなる傾向にある。暮らし向きについては有意差が見られなかったが，暮らし向きの苦しい人の方が好きなジャンルの数が多くなっている点には注意したい。入学難易度については，高難易度と中難易度との間で有意差が見られた（5%水準）。つまり，偏差値が50前後の大学と60

前後の大学とでは，後者のほうが好きなジャンルの数は多い傾向にある。

次に，他の変数の影響を統制しても，同様の結果が見られるのかどうかを調べるために，好きなジャンルの数を従属変数にした重回帰分析を行った（表6）。暮らし向きについては5%水準で負の効果が，入学難易度については1%水準で正の効果が見られた。つまり暮らし向きが苦しく，入学難易度が高い方が，好きなジャンルの数が増える傾向にある。なお，文化資本については有意差が見られなかった。

表6　好きな音楽ジャンルの数についての重回帰分析の結果

変数	B	SE	β	
（定数）				
年齢	.207	.054	.124	***
性別	−.135	.126	−.034	
暮らし向き	−.093	.061	−.051	*
入学難易度	.020	.009	.080	**
文化資本	.218	.063	.115	
父学歴	−.140	.130	−.037	
母学歴	−.050	.142	−.012	
大学所在地	−.158	.170	−.033	
調整済みR^2	.031	***		
n	980			

2. 音楽の好みに関する分析

続いて，音楽の好みについて検討する。表7は，好きなジャンルと入学難易度・文化資本・暮らし向きとの関連をSpearmanの順位相関係数で調べたものである。入学難易度においてはJポップとアイドルが正の相関を示し，文化資本においては洋楽ポップ，Kポップ，レゲエ，クラシック，ジャズが正の相関を示し，暮らし向きにおいてはロックとJポップが負の相関を示している。

表7　好きな音楽ジャンルと各種変数との相関

	入学難易度	文化資本	暮らし向き
ロック	.037	.025	−.070 *
パンク・メロコア	.026	.039	.044
ヴィジュアル系	−.012	.019	.015
Ｊポップ	.072 *	−.008	−.078 *
洋楽ポップ	−.015	.073 *	−.028
Ｋポップ	.041	.109 **	.047
アイドル	.069 *	−.046	.005
ヒップホップ・Ｒ＆Ｂ	−.041	.016	.007
レゲエ	−.025	.082 **	.059
ハウス・テクノ・ＥＤＭ	.034	.016	.014
演歌・歌謡曲	.039	.018	−.007
フォーク・アコースティック	.014	−.010	−.028
クラシック	.039	.136 **	−.035
ジャズ	.056	.103 **	.007
アニメ・声優・ゲーム	−.006	−.023	−.046

次に，以上のそれぞれについて，より細かくクロス表の分析で確認する。まず，入学難易度とJポップおよびアイドルへの好みの関係を分析した結果が表8である。Jポップにおいては，高難易度の割合がやや高くなっているが，有意差は見られなかった。アイドルにおいては，高難易度になるほど割合が高くなっており，10％水準の有意差が見られた。

表8　入学難易度と好きな音楽ジャンルのクロス表分析

	Ｊポップ	アイドル
有意差	n. s.	†
高難易度	80.2	41.2
中難易度	75.0	35.9
低難易度	75.8	33.9
平均	77.4	37.4

表9には，好きなジャンルと文化資本との関係を示している。大まかに言って，5つのジャンルはいずれも相続文化資本と関連しているとみてよさそうである。もっとも，Kポップとレゲエがともに低＜中＜高という関係を示しているのに対して，洋楽ポップ，クラシック，ジャズの場合は低＝中＜高という関係を示している点には注意を払う必要があるだろう。

表9　文化資本と好きな音楽ジャンルのクロス表分析

	洋楽ポップ	Kポップ	レゲエ	クラシック	ジャズ
有意差	*	**	†	***	***
高群	37.4	34.2	6.3	23.9	21.0
中群	27.8	29.3	4.2	12.0	10.5
低群	28.4	22.7	2.7	11.5	12.8
平均	31.1	28.6	4.4	15.7	14.7

そして表10は，ロックならびにJポップへの好みと暮らし向きとの関係を示している。暮らし向きに余裕のない人ほど，ロックやJポップを好む割合が高くなっている。ただしロックにおいては有意差が見られず，Jポップの場合は10%水準の有意差に留まっている。

表10　暮らし向きと好きな音楽ジャンルのクロス表分析

	ロック	Jポップ
有意差	n.s.	†
余裕がある	34.6	74.2
ふつう	37.4	79.9
余裕がない	43.5	81.2
平均	36.9	77.4

続いて，以上の結果が他の変数の影響を統制しても見られるのかどうかを確かめるために，15のジャンルそれぞれを従属変数とした二項ロジスティック回帰分析をおこなった。変数ごとに算出したVIFはすべて1.5未満であり，多重共線性の問題は発生していないと思われる。個別の結果については紙幅の関係で割愛せざるを得ず，以下では結果の概要のみを示す。ここでは，有意義のみられなかったヴィジュアル系と演歌・歌謡曲をのぞく，13ジャンルの正負の影響について示している（表11）。

順に見ていくと，まず暮らし向きはロックとJポップに負の効果をもたらしており，暮らし向きが苦しい人ほど，ロックとJポップを好む傾向にある。また，入学難易度はロック，Jポップ，クラシック，ジャズと正の効果をもつ。すなわち，入学難易度が高い人ほど，それらのジャンルを好む傾向にあ

る。文化資本は，ロック，洋楽ポップ，Kポップ，レゲエ，クラシック，ジャズと正の効果をもつ。これらは聴取を楽しむセンスを親から受け継ぐ必要のあるジャンルとみなしうるかもしれない。

表11　好きな音楽ジャンルについての
二項ロジスティック回帰分析の結果のまとめ

	ロック	パンク・メロコア	Jポップ	洋楽ポップ	Kポップ	アイドル	ヒップホップ・R&B	レゲエ	ハウス・テクノ・EDM	フォーク・アコースティック	クラシック	ジャズ	アニメ・声優・ゲーム
年齢	++	++		(+)			(+)		++	++	++	++	
性別	+++	++	−−−	−−	−−−	−−−	++	+++	++		(−)		+++
暮らし向き	−		−										
入学難易度	+		+								+	+	
文化資本	(+)			++	++			(+)			+++	++	
父学歴												(−)	−
母学歴													(+)
大学所在地					(+)	(+)				−	−−	−	(−)

※＋は正の効果，−は負の効果を表す。また，記号3つで0.1%有意，
記号2つで1%有意，記号1つで5%有意，(　)で10%有意を表す。

また，父母の学歴に注目すると，父の学歴がジャズとアニメ・声優・ゲームに負の効果をもたらしている。父親の学歴が低い人のほうがジャズやオタク系音楽を好む傾向にあることを意味する。また，解釈が難しいが，母の学歴が高い人ほどオタク系の音楽を好む傾向にある。

Ⅳ．議論

1．文化的寛容性に関する議論

得られた知見を整理しよう。まず文化的寛容性については，入学難易度の高い大学にいる人ほど音楽ジャンルを好む数は増える傾向にあった。平均値

を比較すると，低難易度と中難易度との間では差が見られず，高難易度との間でのみ有意な差が確認されたことから，ここにみられる差は，素直に文化的オムニボア仮説（＝学歴の高い人ほど文化的寛容性が高い）を支持する結果とみなしてよいように思われる。

ただし解釈が難しい点も２点ある。ひとつは，統制変数を含めた多変量解析をおこなうと，文化資本の効果が消えたことだ。片岡栄美のおこなった1995年SSM調査の分析では，相続文化資本が高いと文化的寛容性も高くなる結果が示されていたが（片岡 2000→2019：128−9），今回の大学生調査ではそのような結果は示されなかった。もうひとつは，経済的に余裕のない人ほど文化的寛容性が高いことである。これは予想を裏切る結果であり，通常は暮らし向きに余裕のある人ほど文化的寛容性は高いとされている。この点をどう理解すればよいだろうか。

ひとつ考えられるのは，調査設計の違いである。すなわち，先行研究の多くは階層文化の研究として設計されており，分析の焦点は高級文化と大衆文化の境界のありようやその失効を確かめる点にある。それに対して，今回使用した調査データは若者のライフスタイルを多面的に把握する点に置かれており，基本的には誰もが大衆文化を楽しんでいることを前提とした設計になっている。だとすると，好む音楽ジャンルの数は文化的寛容性，つまり高級文化を好む人が大衆文化を許容するというよりも，大衆文化への目配りの深さを示す度合いと解釈することもできるだろう。いずれにせよ，文化的雑食性について詳しく検討するためには，さらに周到な調査設計が必要となりそうだ。

２．音楽の好みに関する議論

音楽の好みに関しては，３つの知見に整理できる。第一は文化資本に関してであり，ロック，洋楽ポップ，Kポップ，レゲエ，クラシック，ジャズが正の効果を示していた。この結果はおおむね理解しやすいように思われる。文化資本がクラシックやジャズと正の効果をもつことはよく知られている。

しかしロックが正の効果をもつことは，それを聴取することが新規参入者にとって敷居の高い行為になっている可能性，言わばロックの壇化（南田2001：85）を示唆しているように思われる。また洋楽ポップやKポップと正の効果をもつことは，洋楽の方が音楽を聴くさいの敷居が高く，邦楽の方が万人向けでミーハーであるといった「洋楽/邦楽差異」（ibid. 134；南田2006）が今なお機能していることを推察させる。

ただし，単純に「洋楽/邦楽差異」の理屈では理解しにくいジャンルもある。この点でとくに注目すべきはKポップだろう。Kポップはアイドルとよく似た傾向を示してもいる。性別と負の効果をもち，大学所在地と正の効果をもつことである。すなわち，これら2つのジャンルは，都市部に居住する女性から支持されている点で共通しているが，今回の調査結果では両者の相違点が明らかになったと考えることができる。もっといえば，アイドルと洋楽ポップの中間に位置するものとしてKポップを理解することもできるかもしれない。2020年前後のBTSの活躍ぶりから示唆されるそうした位置関係を，経験的な調査データから確認できたことは有意義に思われる。

第二は入学難易度に関してであり，ロック，クラシック，ジャズ，Jポップが正の効果を示していた。この結果についても，ロックの部分は理解がしやすいように思われる。つまりクラシックやジャズとともに，ロックが「正統文化」寄りの音楽に位置付けられるようになってきたのではないかという推測が成り立つ。とはいえ，ここでも解釈が難しい点は残る。Jポップが正の効果を示していることをどう捉えるかである。

この点で興味深いのが第三の知見，つまり暮らし向きに関する効果である。暮らし向きはロックとJポップにのみ負の効果を示していて，ここでも両者は類似の傾向を示している。つまり暮らし向きが苦しい人のほうが，ロックやJポップを好む傾向にある。ここから推察できるひとつの解釈としては，今日の日本社会において，ロック（とくに邦楽のロック）がJポップとよく似た機能を果たすジャンル概念になっているのではないかということ

だ（木島 2016）。いずれにせよ，もしもロックやJポップが真面目な苦学生（＝入学難易度の高い大学に通う，経済的に余裕のない学生）に好まれやすいのだとしたら，それはなぜかという問いは，今後も継続して考えるべき傾向であるように思われる。

大きな知見としては以上だが，その他，統制変数との関連で興味深い点を2つ示しておこう。1つは性別との関連であり，女性がJポップ，洋楽ポップ，Kポップ，アイドルというポップス系の音楽を好み，男性がロック，ヒップホップ，クラブ系，オタク系といったサブカルチャー的な音楽を好むコントラストが見られる。これは我々のおこなった過去の調査研究でも見られる傾向であり（木島 2019；木島 2021），音楽の好みとジェンダーとの結びつきの強さが示されている。

もう1つは大学居住地との関連であり，今回の調査ではフォーク・アコースティック，アニメ・声優・ゲーム，クラシック，ジャズが負の効果を示していた。とりわけ，田舎に居住している人ほどクラシックやジャズを好む傾向にあるというのは，あまり他の調査では確認することのできない貴重な知見と言えるだろう。

3. 本稿の限界と課題

大学生の調査は難しい。たとえば片岡栄美も，大学生を対象とした調査において「学生の文化的嗜好性の出身階層差は非常に小さいかほとんど見出せなかった」と報告しており，その理由を「大学という場は，とくに都市部の大学では出身階層の制約を離れて現代的な文化を獲得する場になっている可能性が高い」（片岡 2000→2019：91−92）と考察している。たしかにそのような解釈もあるだろう。けれども文化が「フラット化」して見えるのは，調査対象が大学生であるからという以上に，現状を適切に捉える質問票が設計できていない点にもあるのではないかと筆者は考えている。

本報告はコロナ禍におこなわれた大学生調査の結果を示したもので，調査

の時期や調査対象を筆頭に，さまざまな点で限界がある。とりわけ，ここでの知見が大学生に特有のものなのか，それとも他の年齢層にも当てはまるものなのかが判然としない点には注意を払う必要があるだろう。けれども本研究の母体である青少年研究会のおこなってきた調査の利点は，ポピュラー音楽に比重を置いた調査設計を試みている点にあり，したがってその可能性は，クラシックとポピュラーといった対比ではなく，より詳細なポピュラー音楽内部の差異を発見しやすい点にある。そのような利点を生かして，今後も継続して調査をおこなっていきたい。

Ⅴ．今後の調査研究のための補遺

本稿の分析については以上であるのだが，以下では，文化的雑食性や音楽の好みに関する今後の調査研究のための参考資料として，回答者が自由に記入した「最も好きなアーティストの名前」を，筆者がアフターコーディングしたうえで従属変数として使用した結果について示しておきたい。

表12は，記入されたアーティスト名（度数10以上）を多いものから順に並べたものである。嵐の人気が突出しているのは，調査時点である 2020 年の秋が，活動休止前の最後の数ヶ月だったことも影響しているものと思われる。

表 12　好きなアーティスト（上位）

順位	好きな音楽家	度数
1	嵐	47
2	BTS	26
3	米津玄師	25
4	Official髭男dism	16
5	あいみょん，SEVENTEEN	15
6	BUMP OF CHICKEN，Mr. Children	14
7	AAA，Mrs. GREEN APPLE，SixTONES	13
8	乃木坂 46	12
9	King & Prince，RADWIMPS，TWICE，櫻坂 46	11
10	King Gnu，ONE OK ROCK，関ジャニ∞	10

また，表 13 は自由記述の内訳を示している。1059 名の回答者のうち，無記入が 138 で，計 921 の記述があった。この 921 の記述を，筆者の判断で「男性アイドル」「女性アイドル」「洋楽」「Kポップ」「オタク系」「その他の邦楽」に分類し，前 5 者を以下の分析に用いる。表 14 には，それぞれの類型で人気の高いアーティスト名を示している。

表 13　自由記述の類型化と内訳

類型	回答の数	アーティストの数
男性アイドル	136	29
女性アイドル	55	22
洋楽	56	40
Kポップ	88	28
オタク系	75	61
その他の邦楽	511	198
無記入	138	——
合計	1059	378

表 15 は，好きなアーティストについての自由記述から作成した変数を従属変数として，それぞれに二項ロジスティック回帰分析をおこなった結果をまとめたものである。まず暮らし向きについては，洋楽と負の効果が見られ，女性アイドルおよびKポップと正の効果が見られた。すなわち，暮らし向きが苦しい人ほど洋楽を好み，暮らし向きに余裕のある人ほど女性アイドルやKポップを好む傾向にある。また文化資本については，男女のアイドルでともに負の効果が見られた。これは「正統」な文化資本の相続に乏しい人ほど，アイドルを好みやすいことを意味する。学歴においては，オタク系が父の学歴と負の効果をもち，母の学歴と正の効果をもつ。すなわち父親の学歴が低く，母親の学歴が高い人ほどオタク系音楽を好みやすい。なお，入試難易度については有意差が見られなかった。

表 14　類型別にみた人気アーティスト（上位）

男性アイドル		女性アイドル		洋楽		Kポップ		オタク系	
嵐	47	乃木坂 46	12	One Direction	4	BTS	26	Aimer	5
SixTONES	13	櫻坂 46	11	Tayler Swift	4	SEVENTEEN	15	LiSA	4
King & Prince	11	日向坂 46	4	Alan Menken	3	TWICE	11	澤野弘之（nZk）	3
関ジャニ∞	10	NMB 48	3	Bruno Mars	3	NCT	5	HoneyWorks	2
Hey！Say！JUMP	9	Perfume	3	The Beatles	3	GFRIEND	3	n-buna	2
SMAP	6	NiziU	2	Ariana Grande	2	IZ*ONE	3	Orangestar	2
Snow Man	6	モーニング娘。	2	Ed Sheeran	2	BIGBANG	2	すとろべりーぷりんす	2
ジャニーズ WEST	6	ももいろクローバーZ	2	Queen	2	BLACKPINK	2	まふまふ	2
Kis−My−Ft 2	4	私立恵比寿中学	2	Afrojack	1	Red Velvet	2	After the Rain	1
ジャニーズ	3	鈴木愛里	2	Against the Current	1	AB 6 IX	1	angela	1

表 15　好きな音楽家についての
二項ロジスティック分析の結果（要約）

	男性アイドル	女性アイドル	洋楽	Kポップ	オタク系
年齢	−		＋＋		＋＋
性別	−−−			−−−	(＋)
暮らし向き		(＋)	(−)	＋	
入学難易度					
文化資本	−−	−			
父学歴					−
母学歴					＋＋
大学所在地		＋			

※＋は正の効果，−は負の効果を表す。また，記号 3 つで 0.1% 有意，
記号 2 つで 1% 有意，記号 1 つで 5% 有意，(　)で 10% 有意を表す。

表 11 の結果と比較することで推察できることはいくつかある。第一に，男性アイドルを好む回答者（要はジャニーズファン）の傾向がより詳細に把握できる。表 15 ではアイドルを性別ごとに分類している。これを見ると，男性アイドルを好む回答者は，年齢，性別，文化資本とそれぞれ負の効果を持つことから，若く，女性で，親から文化的な経験を与えられていない人ほど，男性アイドルを好む傾向にあることがわかる。

第二に，男性アイドルへの好みは大学所在地に関係しない。すなわち，表 11 を見るとアイドルは大学所在地と正の効果を持っているが，表 15 を見ると女性アイドルのみが正の効果を持っており，男性アイドルとは有意差がない。言い換えると，都会の大学に通う学生ほど女性アイドルを好む傾向がある（女性アイドルを「推す」ことは都会的な趣味である可能性がある）のに対し，男性アイドルにその傾向は見られない。ではなぜ男性アイドルへの好みは全国的なのか。これについては，ジャニーズ事務所に所属するアイドルたちが長らく（全国ネットの）テレビを主戦場として人気を博しており，女性アイドルの「追っかけ」の方が，男性アイドルのそれよりも全国各地のコンサート会場に足を運びがちなことが考えられよう。

第三に，Kポップの好みに関してはより慎重な分析が必要である。すなわち，表 11 を見るとKポップは文化資本と正の効果を示しているが，表 15 では有意差が確認されず，代わりに暮らし向きと正の効果を示すなど，結果にばらつきがみられるからである。表 11 と表 15 で共通するのは，性別と負の効果を持つことのみであり，このことは，たとえば吉光正絵が継続して調査してきたように（吉光 2018 など），Kポップは女性のファン研究として注目すべきであると同時に，今後の計量調査研究においては，ファッションなどの項目と合わせて分析すべき必要性を示唆しているように思われる。

第四に，オタク系音楽の扱いについてもさらなる慎重さが要求される。大倉韻らが明らかにしたように，たしかに今日ではオタク文化が全国に浸透すると同時に，普通の趣味として一般化している（大倉 2021）。しかし「にわ

か」と「古参」が問題になるように，何をもってオタクと判断するかの境界は難しいし，その境界はつねに揺らいでいる。それゆえ，オタク系文化を好む人の特徴を計量調査でつかむのは難しい。たとえば表11の「アニメ・声優・ゲーム」は，好きな音楽ジャンルとして本人が選んだ回答を分析したものだが，表15の「オタク系」は，回答者の自由記述を筆者がコード化してオタク系に位置付けて分析したものだ。あえて共通点を見出すなら，性別と母の学歴で正の効果を持つこと，つまり男性で母の学歴が高い人ほどオタク系の音楽を好む傾向にあると言えるが，表11と表15ではかなり細部の結果が異なっている。こうした点を含めて，「オタクの一般化」（あるいは拡散）という現象が進行していることはたしかだろうが，他方で，一口に「オタク系」と括られがちな文化の差異についても，調査を継続することで明らかにしていく必要があるように思われる。

文献

Bauman, Zygmunt, 2002, *Society under Siege,* Cambridge, Polity Press.

Bennett, Tony, Mike Savage, Elizabeth Bortolaia Silva, Alan Warde, Modesto Gayo-Cal and David Wright, 2009, *Culture, Class, Distinction,* Routlage.（＝磯直樹・香川めい・森田次朗・知念渉・相澤真一訳，2017,『文化・階級・卓越化』青弓社.）

Bourdieu, Pierre, 1979, *La Distinction. critique sociale du jugement,* Paris：Éditions de Minuit.（＝石井洋二郎訳，1990,『ディスタンクシオンⅠ・Ⅱ 社会的判断力批判』藤原書店.）

Bryson, Bethany. 1996. 'Anything But Heavy Metal'：Symbolic Exclusion and Musical Dislikes. *American Sociological Review,* 61(5)：884−899.

Chan, Tak Wing and John H. Goldthorpe, 2007, "Social stratification and cultural consumption：Music in England." *European sociological review,* 23(1)：1−19.

遠藤知巳，2010,「序論　フラット・カルチャーを考える」遠藤知巳編『フラット・カルチャー――現代日本の社会学』8−49，せりか書房.

平石貴士，2019,「音楽文化オムニボア――ピーターソン」粟谷佳司・太田健二編

『表現文化の社会学入門』49–64，ミネルヴァ書房.
片岡栄美，2000→2019，「文化的寛容性と象徴的境界」今田高俊編『社会階層のポストモダン』（日本の階層システム 5）181–220，東京大学出版会．→『趣味の社会学——文化・階層・ジェンダー』119–149，青弓社.
木島由晶，2016，「Jポップの 20 年——自己へのツール化と音楽へのコミットメント」藤村正之・浅野智彦・羽渕一代編『現代若者の幸福——不安感社会を生きる』45–69，恒星社厚生閣.
————，2019，「Consumption：音楽聴取の雑食性」南田勝也・木島由晶・永井純一・小川博司編『音楽化社会の現在——統計データで読むポピュラー音楽』145–164，新曜社.
————，2021，「アイドルファンはライブに行くか——性差とライブゴアーの関連をめぐって」南田勝也・木島由晶・永井純一・平石貴士『コロナ禍のライブをめぐる調査レポート［聴衆・観客編］——JASPM COVID–19 RESEARCH PROJECTS 2020–2021』89–100，日本ポピュラー音楽学会.
北田暁大＋解体研編，2017，『社会にとって趣味とは何か——文化社会学の方法規準』河出書房新社.
小藪明生・山田真茂留，2013，「文化的雑食性の実相——ハイ＝ポピュラー間分節の稀薄化」『社会学評論』63(4)：536–551.
南田勝也，2001，『ロックミュージックの社会学』青弓社.
————，2006，「若者の音楽生活の現在」浅野智彦編『検証・若者の変貌——失われた 10 年の後に』37–72，勁草書房.
大倉韻，2021，「オタク文化は，現在でも都市のものなのか？」木村絵里子・轡田竜蔵・牧野智和編『場所から問う若者文化——ポストアーバン化時代の若者論』24–44，晃洋書房.
Peterson, Richard A., and Roger M. Kern, 1996, “Changing Highbrow Taste：From Snob to Omnivore,” *American Sociological Review,* 61(5)：900–907.
吉光正絵，2018，「K–POPファンダムの社会学——日本の女性たちの『遊び』の変遷」『ユリイカ——特集K–POPスタディーズ』，50(15)：46–53.

How are Music Tastes and Demographic Variables Related in Japanese University Students?

KIJIMA Yoshimasa

This paper describes how relationship between social stratification and music tastes in Japanese university students. We use data from the survey 'Lifestyle and Attitudes of Japanese University Students 2020', which is a large-scale online survey of students at 19 universities in Japan.

The result shows following. First, preferred music genres tend to increase with more difficult universities. That means what B. Bryson called cultural tolerance. Second, the preference for rock music represents a characteristic of current Japanese music listening. In the past, rock music was a symbol of resistance among the youth. But in today's Japan, however, a preference for rock music does not imply resistance to society or else. On the contrary, rock music tends to be favored by university students with high cultural capital, high admission difficulty, and can't afford the cost of living, making it closer to legitimate culture than to counterculture.

In addition, it is showed the difficulty for capturing cultural omnivorousness or music tastes using survey data, because the results differ considerably between the questions asked in the multi-answer format and those asked in the open-ended format, a more detailed survey design will be required in the future.

Keywords : youth, popular music, music genre, music tastes, cultural tolerance